

モンスター

2004(平成16)年10月2日鑑賞心斎橋パラダイスクエア

★★★★



監督・脚本=パティ・ジェンキンス/出演=シャーリーズ・セロン/クリスティーナ・リッチ/ブルース・ダーン (ギャガ・コミュニケーションズ配給/2003年アメリカ映画/109分)

……ハリウッドの美人女優が13キロ以上も体重を増やし、文字どおりの「汚れ役」となって、「モンスター」と呼ばれた連続殺人犯の実像に迫った感動作。人間の、そして女の悲しさがスクリーンいっぱい広がっていく……。映画完成直前の2002年10月9日に死刑が執行されたことが一層この映画に深みを……。アカデミー主演女優賞をはじめ、数々の女優賞を総ナメにしたのも当然！

第5章

映画のよしあしは俳優で決まる！

シャーリーズ・セロン讃歌！

シャーリーズ・セロンが主役級として登場した映画は、私が観たものだけでも、①『ディアボロス/悪魔の扉』(97年)、②『レインディア・ゲーム』(00年)、③『スウィート・ノベンバー』(01年)、④『コール』(02年)、⑤『ミニミニ大作戦』(03年)など、たくさんある。中でも④と⑤は、私の映画評論の中でも詳しく取りあげているもの(④は『SHOW - HEY シネマルーム 4』96頁、⑤は『SHOW - HEY シネマルーム III』300頁)。

特に『コール』での彼女の熱演は光っていた。いずれにしても、どの映画を観ても、彼女の「売りモノ」は演技力とともにその美貌。そんなシャーリーズがこの『モンスター』では何と！

13キロ以上の体重増とひどいメイクに挑戦！

「世界で最も美しい50人」に選ばれる美貌のハリウッド女優が、体重を13キロ以上も増やしたうえ、ひどいメイクを施し、売春婦から「モンスター」と呼ばれ

る連続殺人犯にまで「転落」、そして12年間の服役を経て2002年10月9日に死刑が執行されるまでの、悲しい女の生きざまを描いたこの映画に挑戦するのは、よほどの覚悟が必要。それを果敢にやってのけた、シャーリーズの女優魂はすごいもの。

映画では、たしかにシャーリーズ扮するアイリーンは、その顔や身体つきのみならず動作やししゃべり方まで、本当に何から何まで「商売女」そのもの。

松浦美奈氏による、面白い視点！

シャーリーズがアイリーンになりきるための苦勞話は、至るところで紹介されているのでここでは触れないが、パンフレットには、字幕を担当した翻訳者松浦美奈氏の面白い解説がある。それは、自分でも「ちょっとイジワルな見方をしてみたい」と書いているとおり、「シャーリーズが不美人になりきる努力は素晴らしいけれど、ハリウッドには“演技のうまい不美人女優”はいくらでもいるはずだ。そういう地味な女優が“素の顔”で演じていたら、果たしてアカデミー賞を獲得できただろうか……？」という視点。

たしかにそのとおりだと思う。私でもそして誰でも、あの美しいシャーリーズが、こんな不美人の殺人犯を演じるというから興味をもつのであって、もともと「演技のうまい不美人女優」をこの主役に抜擢したのでは、観に行こうという意欲は湧かないはず。

「美しいシャーリーズは、美しくない女優がつかめたかもしれないチャンスを奪ってしまったとは思わないだろうか？」「撮影が終わったら当然のように元の美しいシャーリーズに戻ってしまった彼女に、そんなことを言うのはヒガミかな？」という彼女のコメントは、男にはとても思いつかない、女性特有の視点ですごく面白いものだと思うのだが……。

凶悪犯罪+逃避行「物語」を描く2つの代表映画

2人の女連れによる、殺人事件+逃避行を描いた先輩作品(?)は、私の大好きな映画『テルマ&ルイズ』(91年)。女同士で週末旅行を楽しんでいる中、ふとしたきっかけで、殺人事件を犯してしまった2人の中年女。すなわち、夫に不

満を抱く主婦テルマ（ジーナ・デビス）と、恋人に不満を抱くウエイトレスのルーズ（スーザン・サランドン）の女2人の逃避行は、すごく面白いもの。

もう1つ、強盗事件+逃避行の「物語」は、アメリカの1930年代の不況時代を舞台に、ウエイトレスのボニー（フェイ・ダナウエイ）と自動車泥棒クライド（ウォーレン・ベイティ）が、銀行強盗をくり返しながらかつて逃走し、ラストでは銃弾の嵐の中、壮絶な死を迎えるニューシネマの代表作『俺たちに明日はない』（67年）。この映画で、退廃的なヒロイン、ボニーを演じたフェイ・ダナウエイは一躍ニューシネマのトップ女優となった。

このように、凶悪な罪を犯し逃避行を続けるコンビの物語は、反社会的なものながら、主人公たちの人間性そのものが鋭く浮かびあがるため、映画のネタとしては非常に面白いものだ。

2人の女の運命的な出会いと愛だが……？

警察官を含む6人の男たちを殺害したアイリーンが逮捕されたのは1990年。それから12年間の服役を経て、彼女には2002年10月9日に死刑が執行された。この映画は、アイリーンがその恋人（？）セルビー（クリスティーナ・リッチ）と運命的な出会いをした1986年のフロリダからスタートする。

セルビーは、同性愛の治療のためにフロリダにきていた若い娘。売春婦のアイリーンを何ら蔑むことなく受け入れ、「あなたは美しいわ」と言ってくれるセルビーに対して、アイリーンは心を開き、「どこかで2人で暮らそう」と提案した。それによって2人の、どこか変だけれども、それなりに安定した生活が始まるはずだったが……。

現実に生きていくのは大変！

生きていくためにはお金が必要。「お金は私が面倒をみる」と約束したアイリーンは、いつものように「お仕事」のために路上に立ち、1台の車に乗ったが、これが人生最悪の不幸を招くことになった。たまたまこの男（客）はサディスト。自分の身を守るため、アイリーンはやむなく男を射殺。アイリーンは、それを自分だけの責任としてしまいこみ、セルビーと2人でのささやかな生活を夢みて、

堅気の仕事に就こうと必死の努力を続けたが……。

この映画は、全編のほとんどを、このアイリーンとセルビーという2人の女同士の心のふれあいと愛（?）、そしてその人間関係の崩壊の描写に使っている。その本音と本音のぶつかり合いは、すさまじいもの。そして、「売春婦はダメ」「殺人はダメ」などという、通り一遍のお説教や道徳観だけでは語ることができない人間の、そして女の業ゴウの深さを、2人の名女優の名演技の中、見事に描いていく。

セルビーは魅力的な悪女……？

この映画の主人公はもちろんアイリーンだが、その恋人（?）セルビーの占めるウエイトは非常に大きい。セルビーを演ずるクリスティーナ・リッチは、1980年生まれだから、まだ24歳の、小柄で目の大きな可愛い女の子。しかし、映画の中でのセルビーは、かなりしたたかで、手に負えない悪女……？

親から同性愛の治療を命ぜられて、フロリダにやってくるという設定。そして、右手を覆う大きなギブスも何か暗示的……？ またその行動は、極めてエキセントリック。アイリーンとはじめて出会ったその日に、セルビーの方からアイリーンに対してモーション（?）をかけ、アイリーンから逃避行を提案されるとあっさりとこれをオーケーし、さらにアイリーンが殺人を犯した後も、アイリーンの懇願に応じて、パジャマのままアイリーンの車の中へ乗りこんだ……。そして逃避行の中では、お金がなくなれば、アイリーンがヤバイことに手を染めていると知りつつ、「約束どおりちゃんと私の面倒を見て！」とアイリーンに要求。

そして極めつけ（?）は、2人の指名手配や人相書きがテレビで報道されるや、「御身大切！」とばかりに、見事に変身して、アイリーンの逮捕のため捜査陣に協力。さらに、裁判でもアイリーンに不利な証言、と結果的にアイリーンの愛（?）を裏切ることに……。しかしアイリーンは、そのようなセルビーであることを認めつつ、セルビーの愛に頼るしかなかった……。

こんな小悪魔的なセルビーの役を演じたクリスティーナ・リッチは、15歳からさまざまな映画で活躍している「大女優」だけに、その演技力はすごいもの……。

小難しい(?)「解説」はどうも……?

この映画のパンフレットには、宮崎学氏(作家)の「映画『モンスター』／生を受けるという業」があり、ここで宮崎氏独特の「死刑制度反対」の立場からの小難しい(?)解説が加えられている。その解説の中には、難解な単語が並べられ、死刑制度についての宮崎氏のうんちく(?)が述べられ、さらにこの映画におけるアイリーンの死刑執行についての、宮崎氏独特の結論が示されている。

それは一方で、「裁判は死刑を宣告するべきではない」ということだが、他方で、「私は人の命を奪うことが許される時もあると考える」「それは、個人の個人に対する復讐の場合である」というもの。宮崎氏独特のかなり変わった(?)結論に対しては、私が特にコメントしようとは思わないが、その最後に書かれている「個人の復讐を国家に代理させるという死刑制度の持つ無機質な情感には私はどうしてもなじめない。国家が犯人を殺すことで被害者の心が本当に癒されることもないだろう」という感想(?)は、私としてはちょっといただけない……? この宮崎氏の、見開き1頁の解説は、ちょっと凝りすぎでは……?

日本での大ヒットを願うが……

『モンスター』が上映されるのは、大阪では「心斎橋パラダイスクエア」と「梅田ガーデンシネマ」の2館のみ。これは、あの14歳の柳楽優弥君が、第57回カンヌ国際映画祭で主演男優賞を獲得した『誰も知らない』(04年)と同じパターン。つまり、あまり大きく扱われていないということ。『誰も知らない』は、公開直後から人気が沸騰したため、急きょ上映館が拡大されたが、果たしてこの『モンスター』は……?

『モンスター』は地味な映画だが、深く考えさせられる名作。そして、映画の冒頭、字幕で表示されるように、「これは真実にもとづく物語」。R15指定とされたことがマイナス要因になることはないはずだ。こんな映画が日本でヒットするかどうかは、日本人の映画鑑賞眼のレベルを示す1つのバロメーター。その意味でも、この映画の日本での大ヒットを期待したいものだが……。

2004(平成16)年10月4日記